子どもの絵画教育研究

— 幼児絵画の指導実践の視点と課題 —

古賀 隆一

Childrens art educational research

Practical point of view and problems of teaching children painting

KOGA Ryuichi

キーワード：自由画，創作教育，心の表現，教育環境

概要：本論文研究の主要テーマは、『子どもの絵画の見方』である。研究項目は、幼稚園の教育現場で、これまでの保育経験で困ったことや迷っていること等、質問、疑問をまとめ、各園の実践事例を対象に検討課題とした。年長組の子ども絵画の変化と話題性から、主に年長の絵画が質疑応答の中心となっている。

自由画教育を保育の現場で、どのように指導、援助していったらいいのか。その指導、援助実践例を紹介しているが、幼稚園教育要領、5領域の各領域がそれぞれ独立しているのではなく、表現については、領域全体のなかの一分野と捉えるべきである。教育現場では、日々成長していく子どもたちの生活を見ながら、毎日の体調や感情の微妙な変化に対応していかななくてはならない。

幼稚園教諭として豊富な経験と事例に基づき日々保育に携わっている方、又教諭歴数年で経験の浅い方、何れの先生方にも何かしら不安な側面があることは、予測できる。子どもの絵画表現は、生き物として捉えると、理解しやすい。子どもの成長は一日一時、刻々続けるものであるし、成長の方向や方法は人の顔の数程それぞれに違うし違って当たり前だから、子どもの感じ方、表情、表現方法その違いをそれぞれ認めること、さらにどの部分を伸ばしたらいいのかを、まず考えて行動して戴くことを願いたい。幼少期、成長過程の子どもは自然に縦には伸びるが、感性の働きや感受性といった心の問題は、置かれた環境に影響することが大きい。縦に伸ばす教育も必要だが、横に伸ばす心の教育こそが大いに望まれる。

◎研究課題・方法と趣旨

子どもの絵画教育に関する研究は進んでいるとはいえ、教育実践現場では研究成果と指導方法の点で教育環境が整備されているとは言えない。幼児教育の中で自由画教育が認知され久しいが、指導法については未知と捉える部分が多い。この研究では実際の現場で迷う教師のあるべき姿を事例研究、文献研究に基づいて基本的理解を深め、尚実践研究を押し進めることを意図するものである。

南九州大学人間発達学部附属『子どもの学び研究所』（以下本研究所）と連携拠点4幼稚園（天竜第一、二、三、祝吉）（以下連携園）とは、研

究者と教育実践現場の立場から研修を通して、教育の質の向上を図るものである。連携交流のなかで研究事例、実践事例を点検検討し、意見交換を含めた研究会を通して学習を重ね、発展的な教育環境が構築されることが望まれる。

◎研究内容

A. 子どもの絵画の見方について

事前に連携園で質問事項を提出戴き、質問に対する回答の形式。【質問項目順不同、掲載】

B. 東京新聞（2008年）のコラムより、『図工の時間』を取り上げ、参加者に問題点を考えて戴いた。【資料掲載】参加者一斉に黙読の上、講師が

若干補足の解説を加えた。

C. 素描（デッサン）の基礎、実習課題（立方体、球体）を描く。大人の絵画教育の基礎勉強としての演習課題である。子どもの描画と大人の描画の世界の違いと、共通する心理描写を体験する。参考作品の鑑賞と描画の実践課程の実技指導を行った。

鉛筆の使い方・素描の道具としての鉛筆の削り方と扱い方・明度表現について。（明度差の出し方）・面の捉え方と表現技術。

D. 講演資料として、「幼児の絵の見方」（幼児画問答）岡田清著より一部抜粋した資料を配付し、日常的な疑問質問に答えることにした。（A4資料配布、本論文P9に掲載）

A. 子どもの絵画について、質問と回答。（順不同）

① リアルに描くことに対して、マンガ風（質問項目にはマンガチック）になる子への配慮。

・・・リアルな表現とは、大人目（感覚）で恐らく何かを見て描く事を指している。マンガ風というのは、年長者、あるいは大人に教えられたのだろう。いずれも指導としては、よろしくない傾向の質問で、子どもに「見なさい」という教育は技術の押し付けであり、創作意欲を阻害することになる。特に幼年期においては一番悪い環境である。子どもの感性、精神性、創造性、想像力を高める言葉かけが望まれる。子どもの感覚を呼び覚ますような言葉かけ、例えば何かを見て描くのではなく、経験したことだからからどのように感じたか、どのような気分だったか、楽しかったか、といった感覚的な問いかけ等会話が必要。

子どもに具体的なかたちを要求するような指導はさげたい。マンガ風になるのは、描き方を教えられた子どもの逃げ道ではないだろうか。子どもが自発的に描くとき、決して人まねは好まないはずで、技術指導の弊害と創造欲求を阻害された状況とみるべきである。

② 友達の真似をする子に対して・・・子どもにとって人真似は、面白い筈はない。席替えをしたり、創造的な子どもを誉めれば自分も、と考えるのが自然である。自分に自信がなかったり、教えられることで創作意欲を阻害され自由にやりたい

ことが出来る環境になれば真似で満足する子どもはいない。

③ 同じ色を使う子、重ねぬりする子（自由画帳に描く時）・・・たまたまそこに「クレヨン」があり、特に色を意識することもない場合が考えられる。それが意図的であるかどうかは、描く環境、状況を見ないと判断出来ないが、長く繰り返すことは考えにくい。重ねぬりには、お話の展開や、時間の経過を表す事も考えられる。従ってこのこと自体は静観しておいて良い。

④ 描けない、描けない一緒に描こうという子の対応について。「描けない」を繰り返す。

・・・良くある質問である。「一緒に描こう」という子どもについては、大人（教師）が描いて見せたりした経験があると、必ずこのような結果になる。【ローエンフェルド著から引用：「描けない」子どもは、経験のほとぼしるような創造表現を、抑圧されているのです。私たちはそれを、技術の不足、つまり、物事を“適当に”表現する能力がないからだと考えがちですが、子どもには“適当な表現”のための外的基準がないのですから、その考えは間違っています。子どもは、ひとりひとりそれぞれ違っており、その違いのままに自分自身を表現するのですから、“正しい”とか“間違ってる”とかいうことはありません。もし子どもが、自分自身を表現できないなら、何か子どもに自信を妨げているのです。ふつうこの何かは、三つあります。もっとも普通なのは、大人が間違った批評をして邪魔をすることです。子どもは、描いた絵がほんとうらしくないとか“うまくない”と言われたり“どういうふうを描くか？”教えられたりすると、その批評が正当とは思えないので“描けない”といって、とやかく言われないうような態度に、逃げ込んでしまいます。第二の原因も、よくある事ですが、子どもが描こうとするものを、充分こまかところまで思い出せないか、それとも心の中が空っぽかなのです。第三は子どもが、真似して描いたり、なぞって描いたりするのに慣れてしまったので、何かそういうものがないと、自分ひとりでは描けないと思うのです。この三つが、子どもの表現の自由を妨げていたと仮定してそれらを一緒にしらべて

みましょう。もちろん、これからは二度と、子どもの芸術表現に、大人の基準や批評をあてはめたり、絵のお手本を持たせたりしてはいけないということは、改めて言うまでもありません。】・・・子どもが「絵が描けない」といったら、そんな考えを持たせたまま、ほっておいてはいけない。「何が描きたいの？」と問いかける。子どもが、何を描きたいのか見つけださねばならない。子どもの経験や体験したことの印象などを会話のなかから引き出ししていく。心の動きや記憶力の発展、訓練することに繋がる。

⑤ 描いている最中の言葉かけについて（言い過ぎてはいけないと思うが、一言で絵が変わっていくかも知れないと思うのでどんな一言があるとよいか）・例えばぐちゃぐちゃに描いている時など・・・描いている最中の助言は基本的には必要ではない。以下【岡田清著・幼児の絵の見方から助言の指導例 a, b, c, d を一部引用する】

a. 見守る・・・描ききはじめても、時々先生を見ることがある。その時視線が合ったらうなずいてやる。絵を描き進めることは創造活動だから、迷ったり思うようにならなかつたり、いやになつたりすることがあるのは当然で、その時先生の無言のうなずきが、子どもにどんなに大きな勇気、と力を与えるか、言葉による助言は不要である。

子どもの様子に気を配って歩いてみて回る。展開の質や進み具合、用具その他に不備はないか、この時助言が必要になってくるかも知れない。助言には個人と全体へのものがあるが、導入、展開の方向づけもしているから、しつけ等の面はともかく、絵に対しては何も言わないのが良い。励ますだけで十分である。子どもの表現力を信じているからである。

b. 精神面への助言・・・大きな画面に小さく描いたりということがある。大人は真真中に堂々と描いたらいいのと思う場面、子どもによって紙の大きさに対する大きさや位置関係は意識されている事も多い。いわゆる形のない形態の場合にも、子どもにとって画面構成に対する意識が芽生えている事を知っておく必要がある。

c. 造形面への助言・・・5歳くらいになると観察の力も出てきます。観念的描く子に、観察する

ことで概念をくだし、描き方の技術により表現に高度な指導もあるが、この時期に必要なとはいえない。

d. 感動の内面化への助言・・・絵は感動である。感動の深い浅いはあるが、子どもは感動の背景にある、知っていることを描く。経験したことも描く。とかく説明的になり易い。興味の中心が、先生のお話の助言で内面の新たな感動の部分が現れ絵画に変化が見られることもある。子どもの絵は見たものを描くのではない。物と子どもの関係を描くのが絵である。それでこそ絵は自己表現だといえる。

e. 助言のむずかしさ・・・絵は指導しない方が良いといわれる。子どもの心に入り込むむずかしさと、絵は技術で上手くなるものでもない。感動を表現するものである。良い助言とは何か、一番難しい普遍的課題である。子どもの絵を良くするには、描くことで精神の安定への方向付けであると考ええる。

絵がぐちゃぐちゃとは、誰しも経験されることが多い事案である。描いている時に楽しそうであれば、黙って見ている方が良い。描いたものを消す行為であったり、又時間の経過を表す場合もある。前者の場合色の選択に注意は必要だが、それ程問題のない場合の方が多い。幼年期の子どもは、瞬く間に一枚の絵を描く。しかし何を描いたか分からない、何を描いたのだらうと思うこともある。大人の概念で見るとは慎みたい。同じような絵を続けていてもどこかで切り替えるきっかけがあるはずで、一つ一つ卒業していく時期が来ると考えたい。絵を横に伸ばす意味からも辛抱して見守るのが良い。幼児の絵とは一体何だろうなぞ喜々として描くのか。子どもは留まることなく日々刻々成長を続け伸びている。子どもの内面から湧いて出てくる力が創造活動を通して、色と形で表現され作品になった物である。特に幼児の場合絵を描くことが、心の表現の代弁として作品に価値がある。

⑥ 作品として出品したい場合の題材のヒント・・・園内の研究展は年に一度はやりたい。

目的、方法を考えテーマを決めても全員がそのものを描く指導ではなく、どんな場面に興味を

持ったか、というように子どもとその関係を表現する導入が欲しい。又美の性格による分類、材料による表現の違いといったバリエーションが欲しい。題材については、子どもの日常生活の範囲、ハイキングや運動会の様な園の行事等日常非日常の経験、体験を通した子どもとの関わりの表現、子どもの心で受け止めたこと等は題材として適切であろう。ハイキング、運動会を描きましようは、テーマとしてはいいのだがテーマの何かを要求するのではなく、楽しかった、悲しかった、嬉しかったこと、といった子どもの心の有様を制作の導入にしたい。又展示会を否定はしないが、いわゆる公募展は、美を基準に選ぶ傾向があるのでぬたくり的なもの、精神衛生の為の発散的なもの、心理的にみるとよい絵など、保育として意味があっても芸術的に高くないものは入選しないので注意が必要である。事情を知って応募することはかまわないが、これによって入選による賞品とか園の名声を目当てにするなどをもってのほかで、子どもの意志にかかわりないことである。現実であったことでは展覧会に本園から何人入選、といったことを幼稚園の売りにしているところがある事実を確認している。誠に悲しいことと言わねばならない。

⑦ 出来たら子どもへご指導なさっている様子がみられると大変参考になりそうだという意見が多く出ました。(無理だと思いますが)・・・これまでも何度か受けた記憶のある質問である。幼児画の指導は、本来技術等を教える教育ではないことを理解することが、幼児画教育の基本姿勢ではないだろうか。指導方法については、元々描かせることではない、描く場所、描き易い用具の準備と、描きたくるように、子どもの気持ちを向けてやることである。描いていることに口出しの必要もない。増して描き方や、何かを描きなさい等もってのほかである。しかし現実にはいわゆるデザイン分野である構成教育も必要といわんばかりに行われているのが実態ではないだろうか。構成教育は、ぬり絵とは意を異にするがやや近い。このことは精神労働と単純労働の違いと考えれば解りやすい。ぬり絵は時間潰しの労働に過ぎない。必要かつ適切な技術指導はあっても良いが、就学

前の子どもに構成教育の必要性はない。1952年創造美育協会の立ち上げ後に現れた対立する関係にある美術教育団体がある。創美の自由に描かせる心の教育と構成教育等技術指導優先の教育の違いである。現在、自由画教育は、社会主義圏を除き、共通の理解となっている。かつて描き方の指導書なるものが多く出回った時期があった。特に旧ソビエト連邦ソビエトの教育法を中心にした指導がそれで、発達段階に応じた指導と称して描き方を教える指導である。指導者の立場で申せば技術指導が出来れば簡単なことで、このような教育を受けた子どもの心の成長は一体どのように考えているのだろうか。まして、絵が上手い下手といった子どもの世界に定規を持ち込んではいけぬ。感情や心の有様をいかに表現するか、問われているのであって、子どもの感性を無視し機械的に知識を詰め込むが如く技術指導を持ち込む等、笑止千万である。

⑧ 子どもへの指導の様子がみられると・・・に関して・・・幼児画教育に直接関わることと幼児画の教育指導は意味に関連はない。教育現場で幼児に直接関係を持たないでも、資料収集から資料研究をすることが多い。保育、幼稚園現場では、保育をするのはあくまで現場の保育士、教諭である。日常の保育の一環として幼児画教育があるのであって、保育全体の一部に過ぎない。従って日々の生活から伺えることは、子どもの体調や家庭環境、親子、友人関係等様々な要因がからんでくる。幼児画指導の原点は、絵を描かせる技術のことではなく生活の中の流れの中にあるもので、絵画表現が技術として切り取られるべきものではない。従って基本的に指導という教育が保育現場に必要かという点を考えてみると、絵画に関してはあくまで子どもの創造を基準に価値判断するものであって、内容に立ち入ることは避けるべきである。尚、導入の段階で子どものイメージが膨らむようなお話、会話(話しかけ)での方向づけが欲しい。

⑨ クレパスの色にこだわりがあり赤一色で描く。例=雨の色も赤で描いて「他の色も使ってみようか」と声をかけても「これがいい」と言い描き続ける。(他にも母の日、父の日の絵も赤一色

で描く)・・・何かのきっかけでいろいろな色を使うようになると思われる事例。たまたま手近にあったからということもあり、少し長い期間見守っても良いのではないか。あるいは原因が何かを、心や気持ちを中心に、生活の中から探すことも必要。

⑩ 男児(5歳年長)ですが、常に女の子の絵ばかり描く。・・・スケッチブックに、何点も同じ様な感じの作品で、一瞬戸惑った事例である。描かれている絵は、同年の女の子に多く見られる形式的で、そのことについては成長期にあっては、全く問題はない健康的なものである。問題は性の違いである。この時期に将来こうなるという判断は、軽々に出来るものではないし必要もないと考えている。今、興味関心というより、周囲の反応の関心とも受け取れる。生活環境や周囲の人間関係でこれから変化もあると思う。静かに見守っていていいのではないだろうか。

⑪ 絵画などの時間になると、すぐに「描き方が分からない」と言っていて、描こうとしない子どもがいる。どう声をかけるか迷い、頑張って描いてみようか。○○君の好きなように描こうとしか言えない。何と声を掛ければ良いのか。・・・④の質問と共通する部分が多く「描けないも、描き方が分からない」も語意は同じである。この問いに対する回答はそもそも保育者、保護者に問題がある。描き方が分からないという子は、大人(教師)の側が反省する必要がある。子どもの経験や感動といった心の部分の創造活動を引き出すためには、子どもの感じ方、楽しかった喜び等を思い起こさせるお話から導入を考える方向が必要である。一度でも描いて見せる等、やってはならないことである。

⑫ これを描こうと課題を与えて描かせても、全く違う絵を描く子どもには、どう声を掛ければ良いかわからない。「間違っている」と指摘するのか「上手に描けたね」と誉めてあげるのか、どちらのパターンで対応するのが正しいのか。・・・課題という段階で、間違った考え方を含んでいる。年中、年長にかかわらず、課題は一つの導入に過ぎないと考えておいた方が良い。又『間違い』等ないと考えて欲しい。課題は、教師の目標設定

を元に作られるもので、子どもの絵画には、自由画を前提に考えるのが自然である。子どもの創作意欲は、課題の設定で起きるとは考えにくい。増して一人一人が違った目線、興味、関心、経験という見方で考えるならば、楽しかった、面白かった、等々のお話を導入に取り上げ、決して同じ目標を設定することは望ましいことではない。

創造的な作品であれば、絵を通したお話をし子どもの気持ち、感性を意欲的に感じられるならば大いに褒めればよい。「間違っている」と指摘するのか「上手に描けたね」と誉めてあげるのか)に限って言えばどちらも正しいとはいえない。間違い、正しい、上手、下手のジャンルはあてはまらない。何れも子どもの絵には不要であると考えた方が良い。むしろ、全てを受け入れるその上で創造的な作品は、大いに褒める方向が望ましい。

⑬ 最初はきれいに描けていてもだんだんめちやくちやに色を塗り始め、最後は何をかいているのか分からなく子どもがいるどうしてなのか。・・・きれいに描いているという美の基準については、多少の問題がある。子どもにとって絵は、完成させることが目的ではない。描いている時間の経過、過程を、まず大事にしたい。このことが、何を描いているのか分からないに繋がる。子どもの絵の抽象性は、教師の目に置き換えると感じ取る努力が必要な事例であろう。この事例では、課題を設定して目標に向かった節がある。子どもにとってのかたちと色の関係は、大変重要な表現上の要素を持っている。仮にこの事例で上から重ね塗りをする場合、時間の経過の他、忘れてしまいたい、あるいは抹殺したい等の表現も考えられる。追体験や身近な出来事で不快なことや、絵の中でならば解決させられることもある。そのような道具としての意味合いも考えておく必要がある。一般例であれば心の内部の物を探るのではなく、外に向かって発散しているのであるとも考えられる。

⑭ 大きく描くように声かけするが、自信のない子どもは画用紙いっぱい描けずちいさくなってしまふ。そういう子どもに対してどのような援助が必要なのか。・・・子どもは画面の大きさを意識している。画用紙の大小によって多少の影響があったとしても、画面に対する大きさ(画面に対

する割合)は、子どもが描画表現するうえでとても重要なことでもある。子どもに自信があるかないかの問題もあるかも知れないが、大きく描くことについては、子どもの心が決めるもので強要するものではない。大きく描けば元気があるというのは大人概念でもある。自分との関係でその存在が大きいか、小さいかといった関係性を画面に表すことも大いにある。闇雲に大きく描きましようというのは指導が過ぎる。指導して、描かせようとするには、疑問を感じる。大きく描くことの解釈の中で、子どもの中には紙一面すきまがなくなるまで描く子がいる。どちらかといえば単調な動作を続けられるこどもは確かに忍耐力を持っている子どもである。その他、子どもによって一つ大きい動作を始め、紙を見て自分の動作が紙の片方しか埋めてないのに気づき、まだ動作を広げていく。この子どもは重要な美的感覚にひとつである正しい構成感覚を知らず知らず持っているわけである。描こうとする面積についた動作を“感ずる”のわずと創造的傾向があることは明らかである。

【ローエンフェルド著『子どもの絵』から一部引用】2～4歳児の例

・・・大きい紙を持っていても、小さいなぐりがきしかない。

子どもによって大きな動作で大胆にし、ある子どもはきむずかしくおずおずとします。

子どもが、紙の隅っこか、ほんの一部しか使わないのはなぜだかさぐってみましょう。二つの原因が考えられます。小さい動作に慣れていて、大きい紙にすぐ適応できないか、描き始めたところに夢中になってしまい、紙の他のところに注意しないかです。どちらにしろ、子どもは与えられた情勢に、素早く適応出来ないことは確かです。子どもに自由な大きい動作を持たせるようにするのは望ましいことですが、子どもが全部が全部、そういう動作を持って幸福になるとは限りません。このことはけて忘れてはいけません。小さい部屋にいる方がずっと落ち着ける人がいるように、ある子どもは、小さい紙で描く方がずっと安心感もてます。そういう子どもは、他の子どもが、のびのびと大きな動作をするように、伸び伸びと

小さな動作をします。だから、子どもを全部無理に大きい動作で絵を描かせようとするのは、間違っています。しかし子どもにいろいろな大きさの紙を与えるのは、子どもの柔軟性を増すのに役立ちます。紙の大きさは、子どもの動作の大きさに影響を与えるのです。しかし、もし子どもが、紙の大きさにもかまわず、ただ紙を少ししか使わなかったら、それは子どもが隅っこに“引っこんで”いるわけですから、子どもの安定感をもっと強めてあげるようにしなければいけません。子どもにもっと気を付けてあげ、愛情をもち、何よりも、自由に物事を一人でさせるようにすれば、良くなるでしょう。

B. 2008年 東京新聞の文芸欄のコラム、《コンパス》より抜粋【本文は原文のまま】

『図工の時間』・・・【息子が小学一年生の初秋、図工の時間に近くの寺で大仏をスケッチした。教室に戻り、大仏の顔を塗ろうと灰白色の絵の具を絵筆に取ったとき、担任が近づいて言った。「違うでしょ。大仏は緑色でしょ」。次に背後の山々を彩ろうと、赤の絵の具をしばらく出すと、先生は「山を塗るなら緑でしょ」。帰宅して息子は口をとがらせた。「大仏の顔は太陽で光ってた。山にはちょっとだけ葉っぱが赤くなってたところがあったんだよ。『先生、見てなかったの?』って聞いたら『ちゃんと見てましたよ』って怒った」数年前のことだ。「空は青」「太陽は赤」の美術教育は過去のものだと思っていた。よほど緑が好きなのか、先生に質すと「薄緑の色画用紙の、地色をいかした画法を教えたかった」。・・・一年生には高度すぎる。今秋、アーティストや研究者が中心となり、小学校の図画工作の大切さを見直し、その魅力をアピールしようと、「がんばれ! 図工の時間フォーラム」を立ち上げた。実行委員長の藤幡正樹・東京芸大大学院教授は「算数や理科は推論して現実を理解しようとするが、表現することで理解できることもある」と、佐藤雅彦・同大学院教授は「何かに熱中する体験こそが、自分が存在出来る場所をつくる力を養う」と語る。フォーラムは図工の時間の増加を求める署名運動を展開中。実現したら、アート好きの息子は燃えるか、それ

とも「先生とたたかう時間が増えるのはいや」とくすぶるか。(寿)】

2年前の新聞記事から話題を提供した。コラムの内容は、現実の小学校で行われている予想される状況の事例である。

私は小学校の教育現場で4年間の指導経験があるが、教育現場では、教科に関わりなく目標や結果を求めることが多いのも実態である。集団教育であっても、課題教育を通して、出来る限り子どもの自由を尊重すべきで、創作の自由を取り上げてはならない。創作教育において、課題に対する答えを、大人である教師が導くのは創造性の眼を摘むに等しい。

幼稚園の年長と小学一年生と年齢の違いは殆どない。課題を与える教育では、課題に対する結果を想定することになる。初めから自由画として取り上げていけば問題も生じないであろう。子どもには眼で写すという概念は育っていないしその必要もない。つまり心の眼が創造するのであって、指導しようとする大人の方に問題がある。

作品発表展示会等で課題作品を展示し、同じテーマでしかも同じ物を描かせることを見かけることもしばしばだが、人間の平等、教育の平等といったことと意味を取り違えた平等教育であるような気がしてならない。教育は等しくあらねばならないが、教育の機会が等しいことであって、その内容である創作活動には立ち入ることは出来ない。人は仮に10人いれば10の眼10の心があり10の答えが期待できるのが、創造の世界である。それだけでなくは創作の世界に意味はない。仮に課題(目標)があったとしても、子どもの眼と心を包み込む寛容さが、教師には必要ではないだろうか。

C. 絵画実習について

これまでの講演会でも取り上げてきたが、大人の絵と子どもの絵の違いを認識するためにもアカデミックなデッサンを演習で学ぶということである。感覚的な、あるいは感性の表現は作画行動から始まる。試みに感覚的に知り得た知識を基に描いてみる。思ったように感覚が行動に移せるだろうか。紙面の都合で具体的内容の報告は、他の機

会に譲ることとし本報告書では割愛する。演習の意味するところは、大人の絵と子どもの絵についてその違いを以下の文章から考えて戴きたかったからである。

子どもの絵をどんな眼で見えるか岡田清著から『幼児の絵の見方』の冒頭の一節抜粋・・・

【幼児画はわからないか】子どもは絵が大好きで、あっという間にも一枚描いてしまいます。しかし、その絵を見ながら、これは何を描いたのだろうか、何のつもりかしら、と首をかしげることが、しばしばあります。いったい幼児の絵とは何なのか、またどうして彼らはそんなに喜んで描くのでしょうか。思うに、子どもは一時もじっと止まることなく伸びて行きます。そして伸びる力は、子どもの内からこんこんと湧いてくる「いのちの」泉ともいべき活力です。幼児の絵とは、この子どもの内から湧いて止まない力が、創造活動を通して、色と形をもって定着し、一枚の作品になったものにほかなりません。そこで、殊に幼児の場合は、絵を描く仕事は、心の問題として、そのまま人間形成につながる大事なことになって来ます。幼い子どもをすくすくと育て伸ばしていくためには「絵」を大切にしなければなりません。絵を描くことを通じて幼児の性格形成をしていくことは、何としても教育の魅力です。これは全世界の趨勢であって、日本でも、幼稚園、保育園、小学校、そして家庭において、この「絵を描く」ということは、非常な熱意がかたむけられております。なぜ大切なのでしょう。それは幼年期にこそ、「良き心」の勉強をしておかなくてはならないからです。人づくりと申しましょうか。人間一生の性格は六歳までに決まるといわれていますが、その「心」を育てるには、絵を描くことを通じての教育が、とてもよいからなのです。この見地から幼児の絵は、将来画家になるためのものでもなく、手先を器用にするためのものでもなく、創造力をつけ、自発性を培い、美しさに眼を開かせ、そして豊かな心性を持った、心の働く子にしたいと希を込めた、「心の問題」としての、「心の勉強」としての、意義目的をもつことになります。それなのに、ふと「絵なんか描いていないで早く○○○しなさい」などと、不用意にいう母親

も時にあるのは、またなぜなのでしょう。言葉の上では幼児の絵の重要さを納得していても、現実には子どもの描く絵を見ると、一向に訳が分からない。絵とは本物とそっくりなのがよいと、昔風に考えると、今日の幼児の絵はわからないようです。

D. 講演会資料

<講演会資料> (岡田清著より一部抜粋)

幼児の絵の見方 (幼児画問答)

美術教育研究室美術教育 古賀隆一

1. 絵を描く時の姿勢…………… 体全体でできる姿勢が一番、それぞれの仕事の姿、床で描く
2. 画材の選び方…………… 描くこと自体に意義、色画紙、画紙以外、板、ガラス、布、立体
3. 画材の選び方…………… 水性絵具と太筆、平筆、塗毛、事柄を描くにはクレヨン、鉛筆他
4. クレヨンや筆の持ち方…………… クレヨンは先の方、筆は先を長く、鉛筆はB～2B軟質
5. 描くのと塗るのと…………… 塗るのではなく描く、描く気持ちで塗る、絵の精神性、色紙
6. 自由画帳の使命…………… (落書き帳) 毎日描くところに意味、描いたら見る、お話を聴く
7. 作品の処理…………… 各人に袋保存、心配な時に比較、掲示は全員のもの、創造の雰囲気
8. 展覧会に出品すること…………… 年に一度薦、目的と方法を工夫、公募展は「美」が物差
9. 描くのが早すぎる…………… 新しい紙をあげる、つないで広くする、紙の形や色を変える工夫
10. 黒や茶だけしか使わない子供…………… 絵により心の生活を切り開く、原因をつきとめる
11. 近くの子の真似をしやすい子供…………… 創造的な絵を描く子の傍へ、模倣が嫌いになる
12. バックをつけさせるか…………… 構わないが、描く方向へ、白のままか色紙、感動と興味
13. 間違いを描く…………… 科学的真実と美的真実 (子どもの発見と創造) 感じたことが大切
14. クレヨンと水彩の併用は…………… 美的効果は期待できない、よくなった様に見えるだけ
15. 同じものばかり描く子…………… 人形ばかり描くケース、生活指導で創作の方向、概念画
16. 絵を破ったり消すように覆ったりするのは…………… 子どもの心理を知る資料、心づかい
17. 力動的な絵と乱暴な絵…………… 活発と乱暴、力動的な絵は心で描く、乱暴画は手で描く
18. 偶然のよさも生かす…………… 概念画以外は偶然のよさかも、意識させ、美意識を高める
19. 色の感覚といのち…………… 色彩感覚の向上に色紙、(デザイン、模様) 絵を描く気持ちで
20. 色の使い方…………… 想像、実物、無意識感情、手元にある色、先生が決める、好き嫌い
21. 家庭の指導と園の指導…………… すぐに描ける準備、技術ではなく心理的にみる、概念壊
22. ぬりたくり指導…………… 象徴画や空想画の基礎、描く自信造形 (色や形) の練習、絵具
23. 筆以外のいろいろなもので描く…………… 丸筆が一番、指、竹、消しゴム、縄、スポンジ
24. 絵を伸ばす方向は…………… 発達段階に照らし縦横の二通り、表現の卒業、深い心の表現
25. 準備と後始末と…………… 描く作るが基本、後始末は違った楽しみ、洗いながら混色学習
26. 発達の早い子遅い子…………… 無理に引っぱり上げない、その時代の仕事一段ずつ上がる
27. 大きな顔を描いてもよいか…………… 感じた通り、関心の方向、顔はシンボル、訂正不要
28. 絵を回して描くが…………… 円陣を作っている子どもを対象に描く展開図式、視点の移動
29. 知っていることを見えなくても描く…………… X線描法、知っていること、想像画とは別
30. 時間経過を一画面上に描く…………… 説明的に同一画面に描く、終わりを黒で上を覆う
31. 重ねたがらない…………… 重ねることは遠近感覚の表現法、一列に描くのは空間感の未発達
32. いつも正面向きを描く…………… 横顔を描くようになるには時間、エジプト形式の逆も有

◎要約

幼年期の自由画について、これまでも幾つかの疑問、質問に携わってきた。質問を受ける度に思うことは、普遍的テーマが横たわっているということである。『一向に解消されない何か』を考えた時一つの方向性として、先ず指導者たる大人が絵画の本質を学ぶことだろう。また子どもの理解に対しては、人格を大きな心で認めることではないのか。子どもは単に大人を小さくしたものではない。子どもは未発達がゆえに、独自の世界観を持っている。自由平等を享受している私たちは、幼少期にも課題を与え結果を求める教育、皆同じ目標に向かってと、美術教育に誤った平等意識や無用な価値基準の押しつけをしてはいないか。美術教育に関して教育現場が抱える問題は、数十年来あまり変わっていない。原因として、物質的に豊かになったことと情報化とは無縁ではないであろう。簡単に物が手に入り、必要なまでの情報に溢れる時代、大切な創造欲求は満たされなのまま放置され既成の枠に閉じ込め、皆と同じが平等であるという勘違いが横行している。創造の世界は、他人との違いを尊重して成り立つ。お互いの違いを認め合うことは、人社会に最も必要なことではないだろうか。子どもには自由を謳歌してもらいたいし、自由に発想し創造力を身につけさせたい。未来の人生に豊かな心を育む為にも、芸術表現の多くの機会と環境整備が望まれる。精神性の豊かさや心の安定は、生きる上で最も満たされなくてはならないものであるはずだが、結果から導入するといった指導や教材を与えることで満足するといった偏った教育環境こそが先ず見直されるべきである。衣、食足りて飽食の時代にこそ、心の豊かさが求められているのだが、現実には足りていることと本当の豊かさには乖離がある。

創作教育の原点は何か、子どもを理解するには親、教師の学習に期待し、心を育てる心配りを求めている。質問戴いた先生方には、一部思い違いも感じられたが、研究会後の個人アンケートの回答内容を整理してみると、今後大いに期待が持てると感じた。

◎参考文献

- ・チゼック（フランツ・チゼック）の美術教育……W・ヴィオラ著、黎明書房
- ・子どもの絵－両親と先生への手引き－……V・ローエンフェルト著、白揚社
- ・幼児と精薄児の絵が訴えるもの……宮武辰夫著、黎明書房
- ・児童画の心理と教育……霜田静志著、金子書房
- ・色彩の心理－子どもの絵の心理的記録－……久保貞次郎編、文化書房博文社
- ・子どもの絵の心理学入門……フィリップ・ワロン著、(文庫本)白水社
- ・幼児の絵の見方……岡田清著、創元社

◎注記

本書は、本研究所の研究活動及び、連携園と共同研究活動の一環として、実施した美術教育研究である。研究会は、本研究所に連携4園の先生方をお迎えして、日時＝2010年6月28日(月) 15：30～17：30、場所＝本館(研究棟)4F：図画工作室で開催された。当日の司会進行は、幹事園の天竜第二幼稚園。本研究会に参加された方は、連携園から教諭27名。講師は、本論文作成者で、美術教育研究室の古賀隆一が担当した。